

『徒然草研究』—第一五二段・第一五三段・第一五四段について—

● 土 屋 博 映

一 要旨

『徒然草』（以下「本書」と呼ぶ）の中で、第一五二段・第一五三段・第一五四段は、日野資朝卿の話題が連続する。類似の内容が三段も連続する部分は本書の中では稀である。三段も連続するという事は、作者の「兼好法師」（以下「作者」と呼ぶ）が相当興味をもった話題（人物）ということになる。なぜ作者は資朝に興味を持ち、その興味の本質はなんであるかを究明した結果、この三段落は本来、分段すべきではなく、三段がまとまって日野資朝という人物像を描いていたという結論を導いた。

二 本文

① 第一五二段

西大寺の静念上人。腰かがまり、眉白く、誠に徳たけたる有様にて、内裏へまゐられたりけるを、西園寺内大臣殿、あな尊の気色や」とて、信仰のきそくありければ、資朝卿これを見て、「年のよりたるに候」と申されけり。後日に、むく犬のあさましく老いさらぼひて、毛はげたるを引かせて、「この気色尊く見えて候」とて、内府へまゐらせたりけるとぞ。

② 第一五三段

為兼大納言入道召し取られて、武士どもうち囲みて、六波羅へ率て行きければ、資朝卿、一条わたりにてこれを見て、「あなうらやまし。世にあらん思ひ出、かくこそあらまほしけれ」とぞ言はれける。

③ 第一五四段

この人、東寺の門に雨宿りせられたりけるに、かたはものどもの集りゐたるが、手も足もねぢゆがみ、うちかへりて、いづくも不具に異様なるを見て、まもり給ひけるほどに、やがてその興つきて、見にくく、いぶせく覚えければ、ただすなほにめづらしからぬ物にはしかずと思ひて、帰りて後、この間植木を好みて、異様に曲折あるを求めて目を喜ばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なく覚えければ、鉢に植ゑられける木ども、皆掘捨てられにけり。さも有りぬべき事なり。

※以上の本文は、『日本古典文学全集』（以下「全集」とよぶ。各段冒頭の数字は筆者土屋による）

三 全集の注

まずは、①～③の頭注から「まとめ」の部分を取り上げる。以下、※は筆者の考え。

以上の三段（※①～③を指す）は、日野資朝に関する一連の聞き書きであるが、兼好の簡潔な筆は、それぞれ資朝の剛直かつ意志的な性格を、躍動させている。兼好の好みからすれば、このような剛直な態度には同感しないはずであるが、資朝の意志的な性格とその力強い決断とは、当然共感をよせたに相違ない。従来誤りを確認するや、直ちにこれを一挙に全面的に否定する資

朝の態度に対して、「さも有りぬべき事なり」と結んでいるところにも、彼の共感の積極的な表示が見られる。もっとも、この第三の部分の共感には、資朝が、ことごとしく「異様な」作為を否定して、「すなほ」な自然に、つまり兼好のよしとする方向に目覚め回帰したことへの同感が含まれていたことを見おとせないが、第一・二の部分は、このことには関係しない。資朝の性格を、これだけリアルに描ききるには、資朝に対する兼好の関心が、なみなみでなかったことがあったに相違ない。

※「以上の三段」とあるように、この三段をひとまとめに考えている。いずれも「日野資朝に関する一連の聞き書き」としている。「兼好の簡潔な筆は、」以下についての評価は控えるが、「兼好の好みからすれば（中略）剛直な態度には同感しないはずであるが」の「好み」とは何か、まず疑問を抱かせる。「同感しないはず」がどうして「共感をよせた」のか。それを「資朝の意志的な性格とその力強い決断」とにいったとする点は再考の余地がありそうだ。中で、③について、とくに「もっともこの第三の部分の共感には、（中略）つまり兼好のよしとする方向に目覚め回帰したことへの同感が含まれていた」と述べている部分も同じく再考の余地がありそうである。「第一・二の部分は、このことに関係しない」とある点はさらに問題である。「関係しない」とは、おそらく「兼好のよしとする方向に目覚め回帰したことへの同感」にあたるのだろうか、はたしてそうだろうか。末尾で、「資朝に対する兼好の関心が、なみなみでなかった」とあるのは、確かにそうだろう。その「関心」は、はたして好意的なのか、そうでないのかについては、もう少し吟味したほうがよさそうだ。

四 各段落の内容

① 第一五二段

西大寺の静念上人、腰かがまり、眉白く、誠に徳たけたる有様にて、内裏へまゐられたりけるを、西園寺内大臣殿、「あな尊の気色や」とて、信仰のきそくありければ、資朝卿これを見て、「年のよりたるに候」と申されけり。後日に、むく犬のあさましく老いさらぼひて、毛はげたるを引かせて、「この気色尊く見えて候」とて、内府へまゐらせたりけるとぞ。

※最初の第一五二段は、「西大寺の静念上人」の「誠に徳たけたる有様」を西園寺内大臣殿が、「あな尊の気色や」といってほめちぎったことに対し、資朝卿は「年のよりたるに候」と即座に否定した。あろうことか後日に「むく犬のあさましく老いさらぼひて、毛はげたる」を、連れてきて「この気色尊く見えて候」と、「内府」つまり西園寺内大臣に「まゐらせた」という。一度ならず、二度まで、内大臣の発言を、これでもかと否定したのである。これに関し、作者は何の評価もしていない。

② 第一五三段

為兼大納言入道召し取られて、武士どもうち囲みて、六波羅へ率て行きければ、資朝卿、一条わたりにてこれを見て、「あなうらやまし。世にあらん思ひ出、かくこそあらまほしけれ」とぞ言はれける。

※続く第一五三段は、「為兼大納言入道」がとらえられて、「武士ども」に囲まれて、六波羅へ連れて行かれるのを「資朝卿」は見て、「あなうらやまし。世にあらん思ひ出、かくこそあ

らまほしけれ」と、ほめちぎっていて、自分もそうなりたいというようにも取れる。①と同様、これについても、作者は何の評価もしていない。

③ 第一五四段

この人、東寺の門に雨宿りせられたりけるに、かたはものどもの集りあたるが、手も足もねぢゆがみ、うちかへりて、いづくも不具に異様なるを見て、まもり給ひけるほどに、やがてその興つきて、見にくく、いぶせく覚えければ、ただすなほにめづらしからぬ物にはしかずと思ひて、帰りて後、この間植木を好みて、異様に曲折あるを求めて目を喜ばしめつるは、かのかたはを愛するなりけりと、興なく覚えければ、鉢に植ゑられける木ども、皆堀捨てられにけり。さも有りぬべき事なり。

※三番目の第一五四段は、「この人」、つまり「資朝卿」が「東寺の門に雨宿り」したときに、「かたはものども」が集まっていて、「不具に異様なる」を見て、始めは「興」をもって見ていたのだが、やがて「見にくく、いぶせく」思われたので、やはり「すなほにめづらしからぬ物にはしかず」と反省して、帰宅後、「異様に曲折ある」「植木」も同様に「興なく」思われたので、皆捨ててしまったという話である。①から③は、すべて過去の助動詞「けり」が用いられているので、作者の誰かから伝え聞いた話である。いずれも時間、空間的に異なる場所での伝聞を、本書の順番に作者は並べたのである。この③にのみ「さも有りぬべき事なり」という評価めいた一文が添えられている。

五 諸注について

1、『徒然草 全注釈 下巻』（角川書店 安良岡康作）

第一五二段について

本段以下の三段は、日野資朝を主人公とする逸話を三つ列挙した。連作的関連がたどられる。いずれも、他に傍証のない、兼好の筆によってのみ伝わっている事実であって、この三つの段によって、ひとりの個性的人間像が浮かんでくるような書きぶりである。

この段は二段落から成っているが、初めには、西大寺の静然上人の老いて徳たけた様子をした参内の姿に感服した西園寺実衡に対して、「年の寄りたるに候」という、嘲笑と批判をこめた一言を放った資朝卿を描いている。そこには、外相だけで人を判断している無反省で盲目的な「信仰の気色」に対して、そのまま黙って見過ごしてられない、気骨あふれる公卿の人柄が認められる。(中略)

後の段落は、さきの一言の発展として、「静然上人」と同類の「あさましく老いさらぼひて、毛剥げたる」形犬を、「この気色尊く見えて候」といって、西園寺実衡の許へ進上したというのであって、外面で物事を判断してすます実衡の盲目的な愚かさを見ると、黙って見過ごすことのできない資朝の性格が、さらに徹底して、かかる言動をひき起こすに至ったと言うべきであろう。そこには、性格者とも評すべき、一凶（ママ）で、権威をはばかりることのできない、人間資朝らしさが露呈されている。(中略)

また、この西園寺実衡は、祖父実兼〔第一一八段「北山入道殿」。元享二年（一三二一）薨〕が鎌倉幕府の申次となっていた関係上、当時の廷臣間では、親幕派の一人と目されていたことが推測されることから、討幕派の資朝の本段における言動を、そうした朝幕間緊張した対立関係のあらわれたものとする見解が存在するが、それはどうであろう。わたくしとしては、ある日、あ

る時に、卒然として、資朝がかく感じ、かく言動したまであって、親幕派の公卿への嘲笑や皮肉・いやがらせを意図したのとするのは考え過ぎのように思われる。彼の直情径行の人たることは、次の二段にもよくあらわれているのである。

※大体無難な注である。政治的な面も関係あるだろうが、本稿では、それにはふれないことにしておく。

第一五三段

日野資朝の逸事を記した第二話である。正和四年二月二十八日に、京極為兼が召し捕られて、六波羅探題の庁舎に連行されるのを、一条大路の辺で望見した資朝の一言が記されているが、世間的常識からすれば、悲劇とも、悲惨事とも言える為兼の運命を、「あな羨まし」と羨望し、「世にあらん思ひ出、かくこそあらまほしけれ」と心から感嘆しているのであって、彼の気性の強さ・烈しさがことばとなって露呈されているといつてよいものがある。そこには、自己の生を生き尽くし、燃やし尽くさねばやまないというほどの、意欲が表出されている。(中略)

わたくしは、兼好が、この一言に、前段の「年の寄りたるに候」と同じく、資朝の強く烈しい性格の発露を見たものと思う。そして、正中の変に六波羅に囚えられ、佐渡に流されるに至った悲劇的運命の萌しをこの一言の上に認めて、記述したものと思う。名を天下に立てようと思つて言つたという『慰草』の説も、「もし本意を遂げば、敵を又如此せんものを」と思つたという『野槌』の評もわたくしには首肯しかねる。それよりも、むしろ、為兼が自己の意思を貫いて、かくのごとき運命に逢い、そこに自己の生の意義を高く発揚した、男性的痛快さ・壮烈さを資朝が羨望したものとわたくしには思われる。瓦となって全うするよりも、玉となって砕けよともいうべき、自己の生命の全き燃焼・發揮こそ、資朝の欲する所であつたのではないかと想像するのである。

※①と②が同類の話と位置付けるのには賛成する。

第一五四段

日野資朝の逸事を記した第三話であるが、前の二つの話が、「西園寺内大臣殿」や「為兼大納言入道」といって、貴顕の人々に対しての言動であつたのに、ここでは、不具の乞食についての、彼の心情の移りゆきを描いている点に、題材の変化が認められる。しかし、それは、単なる題材の上の相違点であつて、この段にも、前の二段と相通ずる、資朝の個性が鮮やかに発現している。(中略)

いかにも、自己の感情・心情に忠実な、しかも、敏感に反省して、一度実行に移るや、あくまで徹底しなくてはやまない、直情径行の人たる資朝の面目が鮮烈な印象をもって迫ってくる。三段の中で、この段に限って、「さもありぬべき事なり」という、同感・共鳴のことばが添えられているが、素直なもの、自然なもの、順直なものを愛好する兼好にとっては、資朝の考え方とその実行ぶりには、強く心をひきつけられるものがあつたに相違ない。(中略)

この三つの逸話に描き出されている、資朝の人間像は、第一に、直情径行の、しかも、やり出したら徹底しなくてはやまない点に認められる(第一話・第三話)。第二には、人の行為を黙って見ておれない。そして、あくまで、自己の生を燃やし尽くさねばやまない、情熱の溢れた所に認められる(第一話・第二話)。第三には、権威に盲従することをいさぎよしとしないで、自己

の所信を貫こうとする反骨的精神の持ち主であることが、指摘できる（第一話・第二話）

※おおむね納得いく注である。

2、『徒然草 諸注集成』（右文書院 田辺爵）

三段全体についての〔補説〕

以上三段は、資朝についての感銘を述べた名文である。

富倉説に的確に論じていわく、第百五十二段は、建武政変の先駆者資朝の合理的批判精神への同感であり、保守派貴族西園寺実衡が、老上人の老いさらぼいた外貌に随喜の涙を流したのに対し、痛快な悪戯であり、そこに旧習打破の思想、現実主義批判の精神が感じられる。第百五十三段には、一代の名歌人、政界の惑星為兼の土佐配流を見て、若き未来の革命家資朝の放った讃歌の言葉が感じられる。第百五十四段では、宋学の影響を受けた資朝の人柄に対する傍観者の共感が見られる云々。

さりながら、兼好が、この革新派貴族の棟梁と、果してどの程度の面識があったかは明らかでない。

※「名文」かどうかは問題にしてもあまり意味がない。兼好との面識もあまり意味がない。

3、『徒然草の鑑賞と批評』（明治書院 桑原博史）

第一五二段

年老いた静念上人の、腰がまがり眉白く、見るからに高德の僧らしい風貌に、西園寺実衡が、「あな、たふとの気色や」と感嘆したのは、まことに素直な態度である。大体がそういう情緒、雰囲気を重ねずる兼好が、めずらしくもこの態度より、資朝の「年のよりたるに候ふ」というすげない言葉に真実性を認めたのは、わけがある。

外見ばかりを見ての、無批判な讃仰をきらったからである。素直であることを重ねずる一方、兼好は、外面より心を重ねずる人でもあった。外見ばかりに目を向けての実衡の言葉をよしとはしなかったのである。

もっとも、後日、資朝は、みじめなほど年老い毛もはげてしまったむく犬をひかせて、口上とともに実衡のもとに送ったという後日談をも添えている。口上には、「この気色尊く見えて候ふ」と述べた。

ここまで追いうちをする資朝に兼好はなお全面的に共感していたのかどうか。「若き時は血気内に余り、心物に動きて情欲多し。身を危ぶめて、砕けやすき事、珠を走らしむるに似たり」（第一七二段）——批判とまではいかななくても、若さのもつ剛気さと危ふさと、資朝の行為に両面を見ていたのではあるまいか。そうして、それを佐渡に流されるに至った資朝の運命と重ね合わせて、後日談を書き添えたように思うのである。ただし、兼好は、相かわらず自分の意見感想は記さず、客観的に伝承のままに書いたのだという「とぞ」をもって、章段を結んでいる。

※前半はごく常識的な注である。後半は推測の域にすぎない。

第一五三段

「あな羨まし。世にあらん思ひ出、かくこそあらまほしけれ」というのは、自分も武士たちに

囲まれ、六波羅探題に連行されるような身の上でありたい、というのである。(中略)すなわち、罪人になるのがうらやましいのではなく、罪人という悪名(クサキ名)でもいいから、天下に知られるような行為をして生涯を終えたい、という願いだである。一見、名誉欲の強い発言のようであるが、兼好は、二七歳の青年の持つ志の高さを、評価しているのであろう。

※兼好が本当に評価しているかどうかについては多少疑問がある。

第一五四段

もともと芸能にもかかわる集団であったから、乞食の群れに対し資朝が、明るい好奇心を持ったのも、わりからぬ意識である。が、大体はその次に同情の気持ちに転ずるものなのに、資朝は前段の場合と同じく、あくまで自分の側の感情を大切にするだけにとどまっている。「醜くいぶせく覚えければ」というのは、自然なるものを愛する青年の胸中に涌いた不快感の段階にとどまった感情である。彼は、その感情を持ち続けて帰宅した。見ると、わが家には、先日来好んで集めた盆栽がある。(中略)

単なる鉢植えであれば、草木の生育する力を利用して培養と矯姿を行い、天然自然以上の自然美を觀賞しようとしていたのである。それは、自然美とはいいいながら、実は人口による自然美なのであった。資朝はただちにそれらを捨てた。

美意識として、ただありのままのもの、自然なるものを最良としていた兼好の感覚は、

何事もめづらしき事を求め、異説を好むは浅才の人の必ずある事なりとぞ(第一一六段)

大方、なにもめづらしくありがたき物は、よからぬ人のもて興ずるものなり(第一三九段)と、「ことの曲折あるもの」をよしとはしなかった点で、資朝の行為を肯定するものであった。それに、資朝が自分の感情を大切に、鉢に植えた木を即座にみな掘り捨てたという、この行為のすばやさにも、深く共感するものがあつたらう。

※兼好に関する推定については何とも言い難い。

六 三つの段の検証

三つの段のそれぞれの兼好の気持ち等を主観的に推測してもあまり本質に迫ることはできないだろう。いわゆる印象批評の域を出ないからである。諸注にはその傾向が高いことが、引用、検討してわかった。ただ次のようにとらえることなら可能であり、いささかなりとも三つの段のあり方について迫ることもできると考える。

まず、三つの段が、日野資朝の言動・行動を描いていることは明らかである。同一人物についての話題を三つも取り上げるとは、本書に、他に例がなく、そこからだけでも作者兼好法師が、日野資朝について、並々ならぬ関心があったことも言うまでもない。

ところで、本来、本書は、現在見られるような、各段に分けられていたのではないことは、周知のとおりである。ここで、日野資朝に関わるこの部分を、従来の三段に分断することをいったん止めて、一つのまとまりと見てはどうかというのが本稿の試みである。

そういう観点で、この部分に着目してみると、同一人物について、三つの段が続く、のではなく、日野資朝について、三つの、興味のひかれる話題をとりあげたという、つまり三段それぞれが、別々に存在するのではなく、全体の一つの要素として、おのおのがその役割を果たしているという見方をとりいれてもよいのではないか、ということが言える。

①（第一五二段）②（第一五三段）③（第一五四段）を見ると、①と②の構成はよく似ていることがすぐにわかる。

①は、西大寺静念上人の様子に感動した西園寺内大臣に対し、→「資朝卿これを見て」→自己の考えを述べる。

②は、為兼大納言入道の召し捕られて行く様子に対し、→「資朝卿、（一条わたりにて）これを見て」→自己の考えを述べる。

以上のようになっている。ところが最後の③は冒頭からして①②とは異なる。

いきなり「この人」と指示語から始まる。ということは、①と②で資朝卿という人物の興味ある、個性的な話題をとりあげ、本人の性格づけをしてから、その流れで③に発展していくと考えられるのである。①と②は、諸注でも述べられていたように、対象は高貴な人物である。それに対し、③は「かたはものどもの集まり」が対象である。資朝は、この「かたはもの」につき、初めは「尤も愛するに足れり」と思っていたのだが、「その興つきて」、「ただすなほにめづらしからぬ物にはしかず」と思うようになり、帰宅後、同様に好んでいた「曲折ある」植木を、「皆掘り捨てられにけり」としてしまったということだ。

ちなみに①の末尾は「けるとぞ」、②の末尾は「とぞ言はれける。」と伝聞であることが明確な表記になっているが、③だけ「皆掘り捨てられにけり。」と記した後、末尾は「さも有りぬべき事なり。」として締めくくっているのである。この「さも有りぬべき事なり」はそういう意味で注目すべき重要な表現であると考えられる。しかし、諸注では、この部分にそれほど注意を払っているようには見られない。

そこで、本書中にこれと似た表現をさがすと、次の五つがあげられる。

- 1、顕基中納言のいひけん・配所の月罪なくて見ん事さも覚えぬべし。（第五段）
- 2、久米の仙人の物あらふ女のはぎの白きを見て・通をうしなひけんは・誠に手足はだへなどのきよらに・肥えあぶらづきたらんは・外の色ならねばさもあらんかし。（第八段）
- 3、なにがしとかやいひし世すて人の・此世のほだしももたらぬ身に・ただ空の名残のみぞおしきといひこそ・誠にさも覚えぬべけれ。（第一九段）
- 4、女のかたより仕丁やある・ひとりなどいひをこせたるこそ・有がたくうれしけれ・さる心ざました人ぞよきと・人の申侍りし・さもあるべき事也。（第三六段）
- 5、子故にこそ・萬のあはれは思ひしらるれ・といひたりし・さもありぬべき事也。（第一四二段）

これらの使われ方を見ると、少なくとも、対象にかなり納得した表現であることは間違いない。つまり「当然、そうだろう・そうするだろう・そうするはずだ」といったニュアンスを持つ表現なわけである。

五例中、もっとも注目すべきは、5である。形の上ではまったく同一表現である。内容的には、相手の行動・言動について、極論すれば、好意的であり、同情的であり、賛同的である。

この「さも有りぬべき事なり」を諸注では正確に把握していない。同一人物が三段も続くのは、よほど資朝に興味があったに違いないという程度ですませているのでは作者の本当に伝えたかったことが、置き去りにされてしまう危険性がある。

七 結論

①（第一五二段）②（第一五三段）③（第一五四段）は、それぞれ日野資朝についての聞き書きを欠いた段落である。同一人物の話題を三段落も続けることは、本書としては、例がなく、特異

な部分であるといえよう。

もちろん三段落も連続して、同一人物の話題を取り上げるということは、善悪は別にして、作者兼好の興味を引いた人物であるということは確実だ。その点では、世間的に目立ち（常識的ではなく）、個性的な性格の持ち主であったといえよう。

この連続した三段落を取り扱うのには、より作者兼好法師の作成時に近づいた姿勢でなくてはならない。もちろんこの三段落のみならず、古典文学作品、ひいては他の「書記」されたものすべてにあてはまる原則であるが。

そういう姿勢でのぞむと、本稿でのもっとも注意すべき点は、①～③がばらばらに独立して存在するという、段落区分前提主義に陥らないということである。

段落の足かせをとりはらって、例えば、「日野資朝という人物とは」とかいう現代語のテーマでも仮定して、この部分を分析していくと、本来の構成が明らかになってくる。

①と②は、

高貴な人物の言動・行動・状況→「資朝卿、これを見て」→自己の考え・主張を述べるという構造として同一であるということが、まずわかる。同一構造のものを二つ並べたてたということは、作者が「日野資朝はこういう人物ですよ」と読者に知らせたいのだと把握するのが順当なところであろう。

その並べ立てた①と②を受けて、③が存在する。この③は、①と②と並べ立てられたものではない。なぜなら、冒頭が「この人」で始まるからである。「この人」の意味合いは、前の二つの話題を受けていること、「①と②のような発想・思考・行動する人」だと考えられるからだ。「①と②のような言動・行動をする個性的な人に、さらにこんな個性的な(面白い・興味をひかれる)ことがありました」という展開である。

だから、③が、一連の日野資朝でもっとも作者の伝えたいということになる。③の対象は「かたはものども」であり、①と②のような高貴な人物が対象ではない。しかも初めの自分の考えを反省し、帰宅してから、植木(盆栽)を処分するという行動をする。そして、③のみ末尾が「とぞ」が関わらず、伝聞的ニュアンスが減少していて、しかも「さも有りぬべき事なり」という作者の評価で閉じられるというもの。「さも有りぬべき事なり」が好意的な表現であることは確かだが、今はその内容を、憶測を交えずに、推論することには十分ではないことを述べて本稿を結ぶことにする。

参考文献

『徒然草』(日本古典文学全集 小学館)

『徒然草 全注釈 下巻』(角川書店 安良岡康作)

『徒然草 諸注集成』(右文書院 田辺爵)

『徒然草の鑑賞と批評』(明治書院 桑原博史)